
いつかトべるモノ

N.aro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかトべるモノ

【Nコード】

N9681I

【作者名】

N・a r o

【あらすじ】

主人公、君崎隼人は、ある日、鏡の力を手に入れる。
思春期男児にとってユメのような能力を手に入れた彼だったが、
直後、同級生のストーリーカーに襲撃を受け……。

info1

こんにちは。

N . a r o です。

この作品は、異能者バトルコメディです。
中篇連作となっています。

とりあえず、本編二作を予定しています。

- ・何かを映すモノ
- ・何時か飛べるモノ

また、近作はコメディ色が強く、ゲームネタなどを多く盛り込んでいます。

結構マイナーなネタもあるので、分からなくても心配しないでください、アナタは健全です（笑）。

読んでいただけたり、感想などくれたりしたら幸いです。

2009/12/12

管理人のHP「plus」

<http://book.geocities.jp/kimibokucat/plus.html>

僕が力を得たきっかけは些細なことだった。

いや、あれがきっかけだったのかは分からない。ただ単に、あのときに気が付いた、というだけなのかもしれない。

とにかく力を使ったのは六月の初日、つまり昨日が初めてだった。具体的には言えば、昨日の5時限目。クラスで一番可愛いとの呼び声高い、水樹七歌が指名されて黒板の前に立ったときのことだ。

その時？ たまたま？ ある想像をしてしまった。それは思春期男児なら誰でもするようなモノだっただろう。

つまり もし、彼女の真下に鏡があったらどうなるだろうか。そういうものだった。

それを考えるだけなら、別に大したことじゃないだろう。だが、その時の僕は何かがおかしかった。それを思うと同時に、そこに鏡が在れ そう強くイメージしてみたのだ。

結果。

想像<イメージ>は現実<カガミ>になって現れた。

水樹七歌のスカート真下、彼女の靴の上に現れた透明な鏡。そこには、僕が望んだものが映し出されていた。

目を擦ってもそれは消えない。

まず思ったことは、もし周囲の人間にバレたらどうしよう、ということだった。

だが約一分で、その鏡は自然に消滅し、それに気が付いたものは誰一人居なかった。いや、居たとしても、騒ぐものは居なかった、というのが正しいかもしれない。

それから。

状況を認識した後、再度、鏡の生成を試みた。結果、望むところ

に望んだ形で鏡が現れた。

そして、その鏡は自分以外には視認出来ないモノだということも分かった。

つまるところ。

すごい力を手に入れたのだ。

反射に反射を重ねれば、更衣室や風呂場覗きはお手の物（と思われる）。スカート覗きはし放題。あ、ちょっとあの人可愛いな、と思った時に、その人のスカートを覗けるわけである。

自分は健全な男子高校生のつもりだが、健全であるがゆえの欲望というものも持ち合わせていた。ある日突然こんな力を手に入ればこういう考えを起こすのも別に不思議ではないと思われる。

そんな夢膨らむ今日この頃。

そんなときに彼女は転校してきた。

僕の学校は珍しく、ホームルームが昼休みの後に行われる。結果的に、季節外れの転校生が教室に現れたのはちょうど昼の13時10分。

転校生は少女だった。

本名はキャンディス・ブラック。日本では黒崎雨と名乗っているらしい。つまり、日本人とイギリス人のハーフで、帰国子女だった。身長は平均より少し小さいくらいで、かなり小柄だ。ついでに言えば幼く見える。

髪は父親譲りで黒く、眼は母親譲りで碧眼。顔立ちは一目でハーフだと分かるものなのに、髪は真っ黒だから、普通は違和感を感じるのだろうが、彼女の場合は妙にしっくりしていた。

はつきり言って黒崎雨は美少女だった。

水樹七歌が美人、というなら、黒崎雨は可愛いという表現が似合う。

そして、転校生も来た事だし席替えをしよう、という流れになり、くじ引きによる順当な席替えが行われた結果。

黒崎とお隣になることに成功したのだ。

しかも、黒崎は窓際の一番後ろで、僕がその隣。

彼女の隣は僕だけで、まだ教科書を持っていない彼女に教科書を見せるのは僕なのだ。

そんなわけで。

美少女転校生お近づきになり、るるん気分で午後の授業を終え、さて帰ろうと昇降口に向かった僕は、下駄箱に一枚の紙が入っているのを発見した。

どこぞやの青くて可愛いキャラクターが薄っすらと印刷されているメモ用紙には、

『放課後、弓道場で待っています』

とだけ書かれていた。

字を見る限りは、女生徒と見て間違いない（丸っこくて可愛い文字は、男が書いているのだとしたら少し気味が悪い気もする）。

となると。

これはまさかの告白だろうか。少し遅い春の訪れだろうか。いや待て。

字が綺麗だからといって本人も可愛いとは限らない……。

と。そんな心配をしていたが、全て杞憂だった。

結論から言えば、弓道場の前に居たのはクラス一の美少女、水樹七歌だった。

「水樹？」

そう呼びかけると、手を後ろで組んで壁にもたれていた君崎はこちらに気が付いて、はっという表情を浮かべた。

「君崎君……着てくれたんだ。」

君崎は僕の苗字。君崎隼人が僕のフルネームだ。

「そういえば、放課後だけど、弓道部無いのか？」

もう3時45分、部活動開始時刻を回っているのに、弓道場には

人気がまったく無い。

ちなみに、水樹七歌は弓道部員。袴がよく似合うと評判だったりする（オレも一度覗きに行ったことがあるが、真面目に弓道部に入部しようか検討した）。

「今日はオフなの。こないだ日曜日に試合があつたからその代休」
「そっか」

とりあえず納得。

「で、本題は？」

と、話を戻すと、彼女は硬い表情のまま口を開いた。

「相談……なんだけどさ、聞いてくれるかな」

「相談？」

結論。決してクラス一の美少女の用事は、付き合ってくださいという告白ではなかった。

「ストーカー？」

とりあえず、長話になるからと、弓道場の近くにあつたベンチに座つた僕たち。もし誰かがここを通つたら、噂（僕にとつては好都合だが）が流れるかも、などと思ひながら、彼女の話に耳を傾ける。

「もう一週間も前から」

「一週間」

なんていうか。可愛く無い女子が『朝痴漢されたー』などと大きな声で言っていると、何だか非常にむかついたりするものだ。だが、水樹七歌が小さな声で言う分には、まあそんなことをあるかなと思う。

「黒いダツフルコートを着ていて、フードを被つた人がね、部活帰りにいつも付けて来る」

確かに怪しい。真冬ならともかく、暖かくなってきているこの時期に、フードまで被るとするのは、客観的に見てもおかしい。

「最初は気のせいかな、と思ったんだけど、どうも違ってみたいで。帰り道を換えても付いて来て……」

「一週間続いたなら、確かに間違いないだろうな」

ザ・ストーカー行為だ。

ところでストーカーとスニーカーってなんとなく似てるよな。

あ、スニーカーと言えば、僕はコンバースをコンバットと読み間違えていた時期がある。どこと無く感じは似ているが、靴とゴキブリ駆除装置と、まったく別物である。

……。

閑話休題。

「で、警察とか親とか先生とかには？」

「まだ。その、できればことを大きくしたくないし……」

まあ、そうだよな。下手に誰かに相談して、被害妄想だの自意識過剰だの言われるのもいやだろうし。

とは言え、親くらいには相談しても良いものでは無いだろうか。

「で、ええっと、僕は何をすれば良いのかな」

まあ、当然そう思うわけで。

「その、できれば一緒に登下校欲しいなって……」

つまるところ一人では心細いから護衛、というわけか。

しかし、そんな上手い話があつて良いんだろうか。正當にクラス一の美少女と登下校できるなんて。

「弓道部の人で、私と家が同じ方面の人が誰もいないんだ」

ああ。

たしか水樹の家は、駅と反対の住宅街。たまたま徒歩通学の人が弓道部には居ないのだろう。

「なるほど……でも、何で僕？」

僕は、運動部にも入ってないし、体格も大きいほうとはいえない。すると、彼女は、

「ええっと、君崎って、空手で県大会ベスト8入ったことあるでしょ？」

なんて自分でも忘れていたような功績を持ち出してきた。

「そんなことも、あったな。けど、あれは小学6年生の時のことだぞ……」

空手は小学校卒業と同時に止めている。

「けど、クラブで弓道とか古流剣術とかやってるんだよね？」

「いや、実家に弓道場があつて、嗜む程度だし。後、古流剣術じゃなくて、スポーツチャンバラな」

昔から武道とかそんなんが好きで、趣味でやっているだけ。両方遊びみたいなものだ。まあ、空手は割りと真面目にやっていたけど。

「……。と、とにかく！ ダメ!？」

い、いや……。そんな上目遣いで言われて、しかもこの状況で、断れるわけもなく。承諾することによって折れるフラグも無いし。

「良いけどさ。お前さえ良ければ」

というか、むしろ好都合。

まあ、その辺の帰宅部よりは強い自信もあるし。

話も終わったので、とりあえず、立ち上がる。

「じゃあ、特に用が」

言いかけた時。

弓道場の向こう側に人影を発見した。どうやら、壁際にこちらを伺っていたらしい。

まさか……アレが例のストーカーだろうか。

そう思ったときには、完全に壁の向こう側に去ってしまっていた。単に人が通りかかったただけかもしれない。

僕は思考を止め、水樹に向き直った。

「じゃあ、特に用が無ければ帰ろうか？」

何かを映すモノ 2 .

2 .

帰路についてから約十分後。

僕はお喋りが好きなほうではあるが、普段余り話さない相手と盛り上がるほど口達者ではない。

自然のように会話に困り、空気は死にかけていた。

そんな時、水樹が突然口を開き、

「君崎ってさ……シスコンでロリコンだって聞いたんだけど本当？」
なんて恐ろしいことを言ってきた。

「はあ？ ちょっと待て。どこから？ 誰から？ いつのまにそんな噂が……」

「義理の妹さんが居て、しかも溺愛してるって……」

水樹は恐る恐る、といった感じで聞いてくる。

確かに義理の妹が居るには居るが。

「溺愛はしてねえ。そりゃ可愛いとは思うけど！ シスコンじゃねえ！ 断じて！」

とりあえず全力で否定しておく。

すると水樹は無表情、というか軽蔑した顔をしてきた。

「などと供述しており、警察では、嘘の証言と見て、君崎容疑者のシスコン容疑について検証を進めています」

「僕いつの間にか逮捕されている！？」

シスコンって犯罪だったんだな……。

にしても。水樹も冗談を言ったりするんだな、などと思ってみる。
閑話休題。

「そっぴゃー、今のところストーカー居ないな」

「うん。そっぴゃー」

そう言う水樹の顔は、どこか安心しているように見える。

そして、また沈黙が訪れる。

結局、残りの五分強、一度も二人の口が開かれることは無かった。

「ええっと、私、家この団地だから。今日はその、ありがとう」

「あ、うん。全然。どうせ僕帰宅部だから」

「じゅあ、また明日！」

そう言っつて水樹は小走りに去っていった。

僕は役目を終えたので、自宅に向けて再び歩き出す。

そして、角を曲がり二メートルほど歩き　そこで立ち止まった。

振り返るとそこには一人の男。

「お前……何してんだ」

ストーカーは今日もちゃんと居たのだ。気が付いていた。ただ、水樹を不安がらせたくなくて黙っていただけ。

水樹の話どおり、ダツフルコートのフードをすっぽり被っている。身長は173センチの僕より少し小さいくらい。コートがだぼだぼなのではつきりとした体格は分からないが、僕より大きいということとは内科と思われる。

僕は無意識のうちに身構えていた。

そして　敵は攻撃に移った。

手を開いて振りかぶってくる。

平手打ち？　しかし二人の距離はまだ一メートルもある。こんな

速くに手を振り上げる必要は　。

だが。

距離が意味を成さなかった。

突然飛来する炎弾。

それをかわせたのは奇跡、武道の心得があるのを差し引いてもそう呼べるものだった。

一体どこからそんなものだ飛び出したのか。それを探る前に次の炎弾。それは、やはり、男の手のひらから出てきていたと思えなかった。

まるで魔法　　そうだ。

魔法。俺にも使えるじゃないか。

だが、すぐに気が付く。

あの鏡には触れることが出来ない。つまり、それをいくら作ったとしても、無いのと同じなのだ。

ああ、使えない能力！ 覗きにしか使えないなんて本当に意味がない！

だが、悪態をついても仕方がない。

僕は二度目の炎弾をかわし、そのまま全速力で走った。とにかく逃げなければ。

だが、背中を見せたのは失敗だった。

そんなことをしたらたちまち餌食に。すぐに気が付くも、それは遅すぎた。

炎弾はもはや避けようがない距離に。

そしてその炎弾は 切り裂かれた。

僕は突然のことに呆然と立ち尽くす。黒鳥の如くに空から落ちてきた少女。

そして少女は炎球を切りさいたのだ。

その細い人差し指についた爪だけで。

「黒崎」

雨。

本名キャンデイス・ブラック。

僕は、彼女に助けられたのだ。

ようやく頭が動き出す。

どうやら、彼女の登場に驚いたのは僕だけではなかったようだ。見れば、フードの男も呆然と黒崎を見つめていた。

そして、我に返った男は再び炎弾を放つ。

だが、それは無駄だった。黒崎が、指揮棒<タクト>でも振るかのように指先を動かすだけで炎弾は切り裂かれる。

「な……」

男が焦っているのは明らかだった。

そして、悪あがき。
再度放たれる炎弾。
こんな格言がある。

二度あることは三度ある。
無駄。

男は黒崎には勝てない。

それくらい、黒崎の動きは無駄が無いものだった。
戦い慣れしている。

黒い長髪を揺らしながら男を睨む黒崎。

それに男は一步、また一步と引き下がり、ついには背中を向けて走り出した。

黒崎はそれを追おうとはせず、こちらに振り返った。
炎弾を切り裂いた指は無傷。焦げ痕など残っていなかった。

「こんにちは。君崎君」

そう言って微笑みかけてくる。

「黒崎……雨？」

「そんな疑問形で確認しないでよ」

「お前……一体何なんだ？」

その言い方が失礼だとは知っていても、聞かずにはいられなかった。

すると、黒崎は一瞬首を傾けてから、口を開いた。

「あれ、知らないんだ」

「何を？」

「そっか。分かった。じゃあ、改めて自己紹介をしましょう」

僕は彼女の言葉の続きを待つ。

そして、彼女は言った。

「キャンデイス・ブラック。ユメを結ぶモノ<魔術師>よ」

何かを映すモノ 3 .

3 .

魔術。その言葉に一つ心当たりがあった。言うまでも無く、こないだ発現した？鏡？の能力のことだ。

「なるほど……。君崎君はビギナーだったわけか」

「らしいな。それにしても、突然魔術なんてものが使えるようになるとは思っていなかったぜ」

黒崎雨によれば。さっきのストーカー野郎も魔術師らしい。

「いや、君崎君の場合、魔力を原にはしているけど、魔術ではないと思う」

「ん？ そうなのか？」

「君崎君のは魔術じゃない。異能力だよ」

「……それって、なにが違うんだ？」

大差ないように思える。言い方の違いで、両方超常現象じゃないか。

「魔術は、どんなモノでも基本は一緒。魔力を糧に、原子を操作する力。魔術で出来ることは科学でも出来るとされる。けれど、異能力は違う。この世界にあつてはならないモノ。それこそ、何でもアリ。体系も何も無い。そう言うなれば」

神の力。

彼女はそう告げた。

「鏡の能力が 神の力？」

そんな。ただの覗きに使えるだけの能力が神の力だった？

「ええ。そう言うのが正しいわね。特に君崎君のそれは」
つまり

「俺は新世界の神になる」

「チエックメイトです、キラ」

「……………」

まさかこのボケに黒崎が乗ってくれるとは思わなかった。

「ええつと、話を続けようか」

「そうね。……ライト君が書いたデスノートは偽……」

「そつちじゃない！」

「……………」

「……………」

閑話休題。

「君崎君の能力。私は以前にも使う人を見たことがあるわ。彼は能力のことを鏡界結界<ミラーワールド>と名づけていた」

「えらく中二だな。まあカッコいいと思うけど」

「そうね。そいつ中二設定大好きなやつだったわ」

「で、彼の鏡界結界とやらも、見えない鏡を作り出す能力なのか？」

そう聞くと、黒崎は小さく首を振った。

「それはあくまで出来ることの一つに過ぎない。本質は、全てを写す<リアル・トレース>」

「全てを……写す？」

「そう。この世のありとあらゆる物体・現象をコピーする。まさに鏡の能力」

「つまり。いかなることでも、起きたことならば、再現できる。そういうことか」

「理論上は、ね」

「それってめっちゃくちゃすごいのか」

だって思い浮かべたら、好き

「好きな人の身体も再現できるわよ」

「……………」

どういうわけか、コイツはテレパシーが出来るらしい。

僕の心は既に裸なのだろうか。

「まあ、必要ないか。あんなに可愛い彼女居るんだし」

「彼女？ 一応言っておくけど水樹は彼女でもなんでもないぞ」

「え？ そうなの？」

「どうやら。多少勘違いをしているらしいので、一応経緯を説明したほうが良いだろう。」

「とりあえず、手早く今までの経緯を説明する。」

「ストーカー、ね」

「あいつ魔術師なんだろ？」

「襲撃してきた男。魔術師で、ストーカー。」

「そうね。今のあなたでは、水樹さんを守るのはまず無理」

「ですよね……」

「だって、使えることと言えば、こんな風に、」

「と、黒崎の足元に鏡を出現させた直後。」

「突然平手でどこかを叩かれた音がした。」

「それは当然僕の頬で、叩いたのは黒崎。」

「変態」

「ちょ、いきなり何すんだよ！」

「変態！ 私には見えるんだからね。今鏡の力でスカートの中か覗

「こうとしたでしょ！」

「な……鏡は見えないんじゃない……」

「そのはずだ。」

「昨日友達の前で作って試したのだから。」

「見えないけど、私には魔力の動きが見えるの」

「魔力の動き？」

「そ。一種の共感覚みたいなもの」

「共感覚って言えば、音に色がついて見えたりするって言うアレか？」

「ある刺激に対して、同時にいくつかの感覚が同時に生ずる現象。」

「そ。私の場合、魔力を感じる感覚、まあ本当の意味とは違うけど、第六感を視覚で感じ取れるの。私は魔力の流れを色で認識することが出来る」

なんだよそれ……反則だろ。

「申し訳ございませんでした。つい下種な下心が出てしまいました。どうかお許しください」

とりあえず懇切丁寧な言葉で謝ってみる。

「ランチ奢ること」

「……………」

「あーじゃー水樹さん、いやクラスメイトに言っちゃあー」

「……是非。是非奢らせてください」

「ご主人様」

付け足せ、という意味だろうか。

「……………ご主人様」

「キモ」

「……………」

「ま、前の学校じゃ散々覗かれたし、別に良いけどね」

「散々覗かれた!? どんな学校?!」

「ま、色々あったわのよ」

「……………」

閑話休題。

「さて。あの男だけど、私が懲らしめても良いけど、一応、君崎君も自己防衛くらいできるようになっていたほうが良いと思うわね。

だって、ストーカーとしては、ストーキングするくらい好きな水樹さんと、変態、いや男子高校生と一緒に帰宅してるところを見たんだから」

途中、変態と呼ばれかかったが、迂闊に反論できない。

「そうだな。何か、鏡の使い方を教えてくれるのか?」

「もし望むのであれば」

「助かる。何せ、今出切ることと言えば、スカート覗きが関の山だからな」

「じゃ、明日から昼休みに屋上で特訓、というのでどう?」

4 .

「鏡の能力の最も簡単な使い方は、鏡を実体化させているいるなことに使うことなの」

「実体化させる？」

「そう。今のままでは、ほとんど質量を持たず、戦闘には役に立たない。けれど、実体化させることが出来れば、その用途は大幅に広がるわ」

例えば、と黒崎は身振り手振りを付けて続ける。

「手裏剣の形にして投げつけたり、盾として使ったり」

「なるほど」

確かに、そういうことが出来れば、魔術師相手でも戦える気がする。

「ええっと、具体的にはどうすれば？」

そう聞くと、黒崎は一瞬溜め、そして。

「やればできる」

そんなことを言った。

「……そんな、某通信教材みたいな」

「君も一緒にゼミを始めようぜ」

「……………」

あちゃ。実名出しちゃったよ。

「アレさ、たまに来る広告に入ってる、教材を使うことによって薔薇色の人生が待っている、っていうストーリーの漫画。アレいっつも同じストーリーだよな」

「部活も勉強も出来ない主人公が、憧れの先輩にその教材を薦められて、やってみたら、部活も勉強も上手く言って、最終的にその先輩と結ばれて楽しい大学生活」

「あれ読んだあとは、何か、部活も勉強も出来て彼氏彼女も居る自分が想像できるんだよね」

まあ、確かに。

アレのいつも面白いほどに上手くいくストーリーだ。

「実際、あの教材取ったからと言って、彼女出来ないのは良く知ってますけどね」

「そーそ。でも、教材としてはかなり優れてると思うけどね。？ちやんと？やれば成績も上がるよね」
って。

いけないいけない。

話が反れた。

「ま、本当になんとかなく、なんだだよ。鏡が実体を持って触れられる。そう意識するの。声を出したりするのと同じ。声を出すとき意識して『あ』とか『い』とか出すわけじゃないでしょ？ それと同じ。これは魔術・異能全般にいえることだけど、大事なのは慣れなの」

「はあ」

「いまいちパツとしない。長くても良いから呪文とかを詠唱するのほうがいいよな……カッコ良いし。」

「まあ一度やってみなよ。って言っても、またスカートの下とかだつたら……」

……………。

意識を集中する。

まずは鏡だ。これは、思い浮かべるだけで出来る。

黒崎と自分の間に一枚の鏡をイメージ。すると、もの一秒で鏡が現れた。

後はコレを実体化させる。

イメージ。イメージしろ。手を伸ばす。そうすると、冷たい感触が。

「あっ！」

一瞬。一瞬であったが、確かに冷たい感触。

「おー一回目から成功つてのは中々だよ。うん」

黒崎も手を叩いて褒めてくれる。

本当に一瞬。認識した瞬間になくなったけど、あの瞬間、確かに鏡があつた。

これが魔術。

否。神の力。

インドとインドネシアが違う国だと知ったときくらい感動した。

ナスとナスビが同じものだと知ったときくらい感動した。

リメイク版にプラスチックコミュニケーションとプラスチックエーションがあつたのを知ったときと同じくらい。まだまだ出るんだ繰り返し。

小さい頃、誰しもが憧れる魔法。それが今になって現実にあると、そして自分を使えると知つたのだ。この感動は本当に大きい。

そう。僕にとっては、それこそ新世界だった。

「いやー今日からテスト週間で部活休みだよー」

水樹の一言が俺の新世界<幻想>をぶち壊した。

忘れてたぜ。いや、忘れようとしていた。

「orz」

きつちり口で発音しつつ、床にうなだれてみる。

「って、なるよね。特に帰宅部は」

テスト前一週間は部活がなくなるので、運動部に入っている人にとっては、長い休み。だが、帰宅部にとっては単にテスト前。感じ方がまったく違う。

「あー。涼宮だ」

カバンがどことなく重い。別にテスト前だから、いつもは置き勉強してる教科書類を持って帰る、などということはしていないのだが。

「まあ、とりあえず帰ろうか？」

「うん」

「そういえばさ、ストーカーに心当たりとかあって無いの？」

昨日からちよっと疑問に思っていたことを聞いてみる。

「心当たり……」

「例えば最近告白されて、断ったとか」

ストーカーキングするくらいだし、水樹のことが嫌いなはずが無い

「ええっと、実は先々週に弓道部の上野君に」

上野、上野。おぼろげには覚えてはいる。

身長・体格的に、昨日のストーカーでも違和感はない。

「上野君の告白を断ったんだけど、その後、彼弓道部止めちゃって

……」

「うわぁ……怪しすぎる」

逆に彼じゃなかったら誰なんだ。

とは言え、疑わしきは罰せず。それだけで疑うのは良くないだろう。

「あ、でも彼だって決まったわけじゃないから」

「ああ。とりあえず頭の隅に置いておくよ」

水樹はモテるしな。水樹を好きな奴なんて一人や二人じゃないんだし。

でも、水樹ってギャルゲーに出したら、あんまり人気で無いかもな。幼女でもツンデレでもないし。しっかりモノお姉ちゃんキャラだし。そこが二次元と三次元の差と言う奴か。美人キャラはあんまり萌えないからな。

その点、黒崎は二次元でも三次元でもモテるな。なんせ童顔だし。幼女、とまではいかないにしても、高校二年生には見えない。

って。何を美少女に関して考察してるんだ……。

とりあえず、鏡の実体化は、数回に一回は2、3秒、他は大抵不発か一秒弱。この調子で行けばそのうち自由自在になるのではないかと想っている。

今の状態では、まだ実践向きとは言えないが、それでも、魔法が使えるという事実は、自分に自信を与えていた。これなら、魔術師相手でも勝てる気がする

特にすることも無く家でだらだらとしていた土曜日の午後。

突然携帯のバイブが振動した。

振動の種類からして、メールではない。それで、誰かと手にとつて見たところ、画面には『水樹七歌』の文字。

「あ、もしもし?」

「君崎……君」

突然のことに、僕は反応が遅れる。水樹の声が有り得ないくらい震えていたから。

「お、おい? どうした?」

「旧校舎……旧校舎に今すぐ来て」

有無を言わず切れる電話。

一体何があつたのかと思考をめぐらせる。

旧校舎。僕らの中で旧校舎と言えば、高校の旧校舎のことだ。

旧校舎と言つても、場所自体が一駅離れたところに在り、今はまったく使われてない。僕らの高校入試の年から誰も使つておらず、取り壊しを待つ建物だ。

ワケが分からないので、もう一度電話をかけ直してみるが、繋がらない。

もしかしたら、例のストーカーに襲われたりしたのだろうか。そこから先は悪い想像しか浮かんでこない。

何が何だか分からないが、とにかく、旧校舎に向かうしかなかった。

四半世紀以上の歴史を誇るその建物は、それでも廃墟と言った感じではなかった。まだ夕方だが、あえて表現するなら、夜の学校。そう言った雰囲気をかもし出している。

校門を潜って下駄箱に向かうと、一枚だけ開いているドアがあった。

あそこから入れ、そう言うことだろうか。

「……………」

あまりに異臭い。

とは言え、ドアはガラス製で透明、見る限り危ないものは無い。

ここは思い切って行くしかない。

一步。また一步と足を踏み入れ……………中に入る。

「なんだ……………大丈夫か」

安心して、そのまま中に入る。

いずれ取り壊されるのだから、靴は脱がなくても良いだろう。そう思って、下駄箱をスルーした時。

突然の物音。

風を切る音。

茶色の斬撃。

木刀!?

それを地面に飛び込むようにしてギリギリで交わす。

アクション映画に影響されて、飛び込みの練習をしていたのが功を奏したな……………。などと思いつつ身体を起こす。

目に入ったのは、黒いダツフルコートを羽織った人。

水樹のストーカー!?

そう思ったときには敵は駆け出していた。

僕も急いで走り出す。

なにか……………武器になるモノ!

廊下を走ってはいけませんというポスターが目に入ったのは一体何の皮肉か。走りながら、武器になるモノを探す。

「あつた!」

廊下に立てかけてあった棒だけになってしまったモップ。僕はそれを掴んで振り返った。

すると、敵も数メートル離れたところで立ち止まって木刀を構えなおす。

長刀の君崎の名が疼く。

「はぁ！」

気合と共に斬りこむ。

下段からの振り上げ、それは軽く受けられる。だが続けて半円を描いて、降ろし、再度今度は左からの切り上げ。だが、これも受けられる。スपोर्टチャンバラ上級者の君崎から見ても、洗練された動きだ。

すかさず回し蹴りを放つも交わされ、逆に相手の踵をもろに喰らってバランスを崩してしまふ。そのまま埃のたまった床に背中から倒れこみ 押し掛かれて手を押さえられてしまふ。

「くそ！」

もがくが完全に固められてしまっている。

こうなつては自力で脱出は……そうだ！

今の今まで忘れていた。

僕には能力がある！

僕ははすぐさま鏡をイメージする。縦横30センチほど。位置は

顔の前！

そして現れる鏡。僕と敵との間に突然現れたそれは、敵に確かな隙を作る。それについて勢い良く起き上がり、敵の胸に手を押し込んで、逆に押し掛かり……押し掛かり……アレ。

押し込んだ手。

本来ならそこには強靱な胸板があるはず。

だが、あったのは冗談のように柔らかい感触……。

そしてフードが外れた敵の顔は……

「意外とエッチなんだね、君崎君」

綺麗な声。

その顔も決して野郎のモノではない。

「……符条静香!？」

弓道部のエース、間違いない符条静香だった。

「こんにちは、君崎くん」

「符条、何やってんだお前」

思わずそう聞くと、彼女は何故か視線をそらして、口ごもった。

「私に……それを言わせるの？」

「いや、お前しかいえないだろ」

「……君崎くんって実はサドなんだね」

「いや、何で急に僕がサド!？」

「分かったわよ。言えば良いんでしょ? ……誰もいない学校でク

ラスメイトの男子生徒に押し倒されて、胸を触れているわ

と。

その説明で、自分の状況を理解する。

右手は以前押し付けたまま。

「ごめんなさい!」

勢い良く飛びのいて謝る。

すると、符条はゆっくりと起き上がって、こちらを見つめてくる。

「……君崎くんなら……良いよ」

「何で!?! どうして!?! いやいや。まずいって。ラノベなんだ

から! いま業界も規制厳しいから!」

「大丈夫。今からでも『登場人物は全員18歳以上です。また全て

の行為は同意のもので行われています』って書けば何でも許される

わ

「許されないから!」

さておき。

「お前なのか? 僕をわざわざ呼び出したのは」

そう聞くと、彼女は立ち上がり、埃を払いながら、頷いた。

「そうよ。ほらコレ」

そう言って彼女はポケットから携帯を取り出す。

「見覚えあるな……」

「七歌の携帯よ。ちよつと借りたの」

「僕を呼び出すために？」

そう言えば。

あの時、水樹の番号からだったから、本人だと思い込んでいたが、良く考えればちよつと声が違ったような。

「言っておくけど、ちゃんと借りたんだからね？」

「……それは分かったけど、何でそんなことをしたんだ？」

「試すため」

「僕を？」

「そう。あなたがどれだけの腕前なのか」

「何故？」

「七歌を守るだけの力があるのか」

「守るだけの、力？」

「だって、敵は私と同じ、夢を結ぶモノ<魔術師>なんだから」

符条静香。

水樹と同じ弓道部所属。弓道部での通称はエロ。

どういう意味か。そのままの意味である。

制服の上からでも伺えるスタイルの良さ。それもそう呼ばれる原因の一つでは在るが、一番は彼女自身下ネタが大好きということ。

口を開けば卑猥な言葉が飛び出し、する、やる、行く、などと言うだけで過剰反応する様は、もはやエロとしか言いようが無い。

弓道部員が『あのエロ』もしくは『あの変態』と言ったら、間違いない。符条静香のことである。

クラスでの（一方的にだが）ベタベタぶりから、水樹七歌と百合なのでは、という疑惑もあり、本人も否定していなかったりする。

ちなみに、サブカルチャーをそれなりに嗜む僕でも分からないことを知っていたりするくらいのおたくでもある。

男子は、エロい話ができる女子を好んだりするが、彼女は行き過ぎ感が否めない。

とは言え。

健全者とは言えないにしても、僕にとって彼女は一般人だったが、彼女は立った今、

「私は、魔術師だ」

そんなことを口にしたのだ。

「それは……どういう意味だ？」

「まんま。私魔術使えるのよ。黒ちゃん　黒崎雨から聞いてない？」

聞いてない。

「なんだ……。まあ、そういうことなのよ。ところで、君崎くん突然の切り替え。

一体なんだろうか。

「君崎くんは突然、『ブルマ！』って叫びたくなる時があるでしょ？」

「ねえよ！」

どこの変態だ。

「そんなあなたのために、良い解決策を教えてあげるわ」

「……絶対に必要ないが、一応聞こう」

「こう叫ぶの。『大盤振る舞い！』」

「……はあ？　大盤、振る舞　はっ！」

まさか……これはっ！

「そう」

「ブルマ良い！？」

「ミソは『舞』を『マ』ではなく『マイ』と読むこと。あとアクセントも大事だわおおばんブルマ良い」

「すげえ！　これで堂々と『ブルマ』と連呼できるぜ！　大盤振る

舞い！ 大盤振る舞い！」

……。何をやっているんだ僕は。

というか、話を始めた符条が変態を見る目で僕を見ている。

「……そっか。やっぱりそうなんだ……。私スパッツ派なのよね……」

「……」

「そこ!？」

「まあ、それは置いて」

「自分で話逸らしておいて何事の無かったかのようにしてるな」

「とにかく。君崎くんを呼んだのは、私の七歌を守る力があるかを試すための」

「いまさらつと『私の』と言ったな！」

「七歌は私の初恋なの！」

「……………」

百合だつてのは本当だつたんだな。

「ともかく。七歌がストーカーに狙われてるのは知っているでしょ？」

「ああ」

そのことで相談を受けているわけだからな。

「そいつが魔術師だつても黒ちゃんから聞いたわよね？」

「まあな」

「分かるでしょ？ 危険なの。だから、守る人数は多いに越したことは無い。黒ちゃんと私、それに君崎くんを守れば、三柱の守りでしょう？」

「まあ、分かる。で、僕がどこまで使えるか試したってわけか」

「そゆこと」

そりゃそうだよな。初恋（大いにツツコミたいところだが！）の相手がストーカーに狙われているんだ。心配するのは当然か。

「まあ、分かった。とは言え、突然木刀で斬りかかって来るのはどうかと思っけどな」

とりあえず言いたいことを言っておく。

「それについては、悪かった。ただ、敵は決闘を申し込んでくるわけではない。だから奇襲にも対応できるかが試したかったんだ」

「……まあ、別に良いけどさ。ところで、黒崎雨とはどういう関係なんだ？」

「黒ちやんと？」

「だってあいつこないだ転校してきたばっかりじゃないか」

「ああ。まあ、引越してくる前からの友達なの。娘同然だわ」

「初恋の次は娘!？」

「可愛いし」

「……………」

もうツッコミは止めよう。

「まあ、結果的には合格ね。大丈夫。ストーカーごときなら君崎くんでも対抗できるわ」

「それは、どうも」

こうして、僕は水樹七歌を守る騎士第三号に任命されたのだった。

「ああしいちゃんのこと知っちゃったんだ」

黒崎はお弁当のフタを空けながら僕の話聞いてかすかに笑った。しいちゃん、というのは符条静香の静香から取った仇名だろう。

「まあな。お前のことを娘、水樹のことを初恋だと抜かしていたぞ」
「はは」

黒崎は小さい箸で小さい口に玉子焼きを運ぶ。

なんか、可愛い。

……っていうか、何でのんきに昼飯食ってんだ、僕。

能力の修行はどうした、僕。そのために黒崎と屋上にいるんじゃないかってつけか。

……ま、いつか。なんか幸せだし。

「そういえば今日符条休みだったな」

珍しいことだ。普段は風邪など引かないし、本人いわく『遅刻はしても早退はNon Non Non Non!』らしい。つまりところよく遅刻する。が、休みとか早退はほとんど無い。というか今まで一回も無かった。

「ちよつと用事からしくよ」

「へー。葬式とかかな」

まあ、遅刻が多いから皆勤賞関係ないから、休みくらいどうってことないけど。

「なんでも3日は戻ってこないって」

「3日も休むのか？」

それは長い。っていうか羨ましい。

「ところで、君崎君、どこまで出来るようになったの？ 鏡の力」

「ん？ まあ、実体化を平均して3秒くらい」

「そっか。やっぱり上達早いね」

「そう言えば気になってたんだが、魔術師って世の中に一杯いるものなのかな？」

「んー。どうかな。魔術師の血筋ってのがいくつかあって、その血筋の人は大抵可能性を秘めているけど、全部が全部魔術の存在を知っているわけじゃないし」

「魔術師の血筋？」

「そう。黒崎もそうだし、君崎もそうだよ。もっとも、君崎の人間は大抵魔術のことを知らずに過ごすし、どっちかってつと能力者が多く排出されるかな。結構レアな血筋よ」

「へえ……君崎が」

「ってことは、従姉妹とかも才能あんのかな。」

「まあ、日本で魔術師って言ったら、遠野、白城、黒崎が御三家、それに特殊なパターンの君崎。これが有名どころかな。もちろん、それ以外でも突然変異的に生まれる場合もあるけどね」

「そっか。じゃあもう一つ。なんか魔術師をまとめる機関とかあるのかな？」

「まとめる機関……か。力の上でそういうのは無いかな。協会は少人数で、円滑にことを進めるように勤めてはいるけど、強制力は無いから。それに、魔術師ってのは社会に必要とされていないモノだしね。あ、ただ魔法学校的なものはあったりするよ？」

「あんのか魔法学校！？」

「というか住人が魔術師だけって島が在るの。必然的にそこは魔法学校になる、ってわけ。世界でも三つしかない魔法学校のうちの一つ」

「なんか通ってみたいなその学校。」

「どうやら、僕の知らない世界が広がっているらしい。」

火曜の一日は空きで、他人より遅く登校できる。そのため道行く人も少なく、快適な登校が実現している。

そんな高校まで後300メートルというところで信号待ちをしていると、前方に見覚えのある女子生徒を発見した。

「よお、黒崎」

呼びかけると、小さいそいつは振り返る。

「あ、シスコン、おはよう」

「ちげえよ!」

そんなわけで、二人で歩き出す。

「あのね。君崎君、授業中真っ白いノートを眺めていると、突然、妹に対する愛の言葉を綴りたくなるでしょ? そんなとき……」

「ならねえよ! ……でも、気になる。続けていいぞ」

「……お得情報なのに」

「……………」

「それでね。そんなとき、『妹が大好きだ!』って書きなぐって、それを教師に見付かったことがある君崎君の欲求を解消する方法を教えてあげる」

断っておくが、そんなことは一度も無い。

「……………聞くだけ聞こう」

「良い? カタカナでこう書くの。イモウトガスキー」

「馬鹿か。カタカナにしたところで結局同じ……じゃない!??」

「そう。どこぞの作家なんじゃないの? 的な印象を与えられるのよ」

「コレは!? もし、教師が文学に詳しい人なら『あ、もしかしてこの子罪と罰とかが好きなのかな』。と上手くいけば文学少年だと言っ印象を与えることすら可能!??」

コレはもしや世紀の不思議発見!?

「スキーをダイスキーに変えると尚、愛情が伝わるわね」

「よっしゃー! これからイモウトガダイスキーって書きまくるぜ!」

……。僕は何をしているんだろう。

そんな不毛な会話をしばらく続けていると、あつというまに学校に着いた。

「一限数学で同じ教室だよな？」

「うん」

ちょうど一限が終わり、皆が教室を移動している途中。そんななか、自分達は一限空きで、割とさっきまで寝てました、と、ちょっとした優越感に浸ることができる。

ちなみに、水樹も火曜一限空きで、数学からのはずなのだが……。後1分しかないのにまだ来てないな、水樹

「本当だ。遅刻かな？」

そうこう言っているうちに教師がやってきて、授業が始まってしまった。

自体が急変したのは放課後になった直後だった。

僕の携帯に届いた一通のメール。

『旧校舎で水樹と待っている。必ず一人で』

差出人は水樹となっているが、コレを書いた人は水樹ではない。つまり例のストーカーからと思われ、その場合、水樹とストーカーと接触は必至……。

「黒崎！ これを見てくれ！」

帰り支度をしていた黒崎に駆け寄って、携帯を突きつける。

「何……ん！？」

短いメール文。黒崎はその意味を一瞬で理解したようだ。

「ついに、こうなっちゃったか。……そういえば、今日上野君も休んでいた」

「……よし。とりあえず行って来る」

「一人で？」

「そう書いてあるからな」

それに。いくら魔術師だとは言え、黒崎は女の子だ。それに加勢を頼むのは男として情け無い。

「……私も行く、と言いたいところだけど。今の私では単なる足手まといだから……。分かった。黒崎君。ちょっとこつち来て」

何かを決心した様子で、黒崎は教室の外へ向かった。僕はそれに黙って付いていく。

しばらく歩いてたどり着いたのは、放課後は誰もいない多目的室。教室の中ほどに入ったところで立ち止まる黒崎。

「……君崎君、ファーストキスは？」

「は？」

あまりに突然の質問に僕は冷静な対応が出来なかった。

「あるの？ ないの？」

黒崎ははつきりとした口調で聞いてくる。その威圧感に押されて、思わず正直に答えてしまった。

「……無い」

「そう。じゃあ、やっぱり痛いほうになるけど我慢して」

そう言って黒崎は歩み寄ってくる。そして、両手が僕の頭を掴んだ。

黒崎が精一杯背伸びをしているのが見える。

まさかキスをするんじゃ。

頭を引き寄せられ、黒崎の顔がどんどん近づいて来る。

首筋に触れた。そのまま首筋を甘噛みされる。

「黒……」

何をしているんだと言いかけたとき。

首筋にチクリという痛みが現れた。激痛には程遠い。せいぜい針でさされた程度の痛みだ。

何かが入ってくるのが感じられる。

まるで予防注射のようだ。

5秒ほどで黒崎は唇を離れた。

「……終わり」

そう言う彼女の頬が少し赤くなっているように見えるのは気のせいだろうか。

「今何を？」

甘噛みされた部分を手で触ると、そこには彼女の唾液。

「魔術師の体液は魔力の塊。これで君崎君の魔力を底上げできる」

「……………どうということだ？」

「私の魔力を分け与えたの」

つまり、戦うために力を貸してくれた、ということか。

「……………ありがとう黒崎」

「どういたしまして」

「じゃあオレ行って来る」

「私も後から行くわ。家に道具を取りに行かないと。もしもの時はすぐ電話して」

「分かった」

そう言うってから僕はカバンを肩にかけて多目的室を飛び出した。

つい昨日来たばかり旧校舎。当然何かが変わっているはずも無い。それどころか、緊張感まで昨日と一緒である。昨日は符条の冗談だったが、今回はそう言うわけには行かない。

おそらくマジ。真剣と書いてマジ。

「私に恋しなさい」

……そんな冗談を言っても始まらないので、歩を進める。

昨日下駄箱の陰から襲撃を受けたせいもあって、その前を通るときは心臓が高鳴る。

だが、取り越し苦労だった。

どこに行けば良いのか分からないのでとりあえず昨日と同じ道のりをたどる。すると、昨日は無かったものを廊下の真ん中に発見した。

人骨模型。

廊下の真ん中に立っている。

一体なんで。そう思ったと同時にあることに気が付いた。本来無くてはいけないもの、無いのは不自然なものが無い。

その人骨模型には柱となって支える棒が無かった。

一体どうやってバランスを取っているんだ？

それを確かめるべく、近づいて手を伸ばす……。

反応は遅れてしまった。

突然模型の左手が僕の右腕に直撃する。が、所詮重みが無い。

僕は条件反射で反撃に移った。骸骨の胸に蹴込みを喰らわせる。

吹けば倒れるような骸骨だ。蹴込みに耐えられるはずが無く、床に叩きつけられ数メートル先で真っ二つになった。

「サプライズ……のつもりか」

骸骨が一人でに動くなんて普通に考えれば有り得ない。ワイヤーが何かで動かした、そう考えるのが妥当だろう。

が、そのワイヤーは特に見当たらない。

どこかで見ていて、手繰り寄せることで回収したのだろうか。

そう考えをめぐらせていると、ズボンのポケットが振動していることに気がつく。メール。差出人は水樹だった。

開くと、一言。

『体育館に来ること』

体育館。近くにあったプレートにはこの先にあると書かれている。おそらく敵はそこで待ち構えている。最善の準備をして。

みすみす罠に飛び込むことになる。

が、それ以外に選択肢は無かった。

大丈夫。今の僕には、能力がある。それに、クラブじゃ『大剣の君崎』と呼ばれているんだ。

自分に言い聞かせ、廊下を進む。

やがて体育館の入り口にたどり着いた。

「ふう……」

一呼吸。

そして、扉を押す。扉は軽い軋みをあげながら開く。広がった視界に入ってきたのは 何十もの人影だった。

人、人、人、否。

人ではない。

人形。

それだ。

人形だった。

ざっと数えて20前後の人形、マネキン人形が壇上にひしめき合っている。

裸のマネキン人形がここまで気持ちの悪いものだとは思わなかった。人を模していて、しかしそれとはまったく違うそれが、ひとりで立っている姿は気持ち悪いとしか言いようが無い。

そして、その中央に二人の人間。一人は立っていて、一人は教壇の前に座っている。

言うまでも無く座っているのは水樹。立っている人間は、上野。水樹に告白したという元弓道部員、上野和正だった。

平均身長に平均体重、顔もイケメンではないが、かつこ悪くも無い。パツと見注の上、といったところか。

「……どうも。君崎」

上野は、僕が入ってきたのに気がつくとも手を上げて挨拶をした。僕はそれを無視して睨みつける。

水樹も僕が誰だか認識したようだ。

「君崎君！」

手が後ろに回っているところを見ると、縛られているのかもしれない。

僕はすこしずつ壇上に近づいていく。

「……何のつもりだ、上野！」

「別に、何のつもりでもない。ただ、水樹さんを連れてくれば君崎も来ると思ってるね。大丈夫。人質にしたりはしないし、その必要も無い」

すると、上野の一番近くにいたマネキンが動き出した。まるで、普通の人間のように間接を曲げ、歩き出す。それは見ていておかしな光景だった。到底ワイヤーで操られているようには見えない。

「水樹さんには魔術のお話をしていたんだ。知ってる通り、オレは魔術師だから」

動くマネキン。

それも魔術によるものだと言うのか。

「いや、正確に言えば、コレは魔術ではないけどね。異能だ」

魔術と異能。魔術は基本は同じ、原子を動かす現象を起こす術。対して異能は何でもありの力。世界の物理法則と同レベルの法則によって成り立ち、ゆえに物理法則に縛られない。

つまり、人形が動いているのは異能の力、ということなのだろう。

「さて、君崎君って武道が得意なんだよね？」

マネキンが近づいてくる。

「何を……」

と、今まではマネキンが動いていること事態に気を取られて気がつかなかつたが、良く見るとマネキンの右手には銀色に光るものが握られていた。

包丁。

俗にそう呼ばれる刃物だった。

当たれば死を招く、分かりやすい凶器。

自然と汗が流れ、身構える。だが、本物の刃物はただそれだけで威圧感がある。

マネキンは包丁を振り上げて、こちらに向かってくる。途中、壇上から飛び降り、難なく着地し、マネキンとの距離は5メートル、4メートル、徐々に近づいてくる。

僕は動かない。動けない。

待つ。待つ。待つ。距離、後3メートル。

まだまだ。必中するにはまだ足りない。

2メートル。1メートル50センチ。1メートル40センチ。

空気を握って右手を構える。半秒でそこに鏡でできた剣が現れる。すかさずそれをマネキンに投げつける！

鏡剣はわずか3秒のみこの世に実現した。僅か3秒で存在を消した。だがそれは距離を埋めるに十分な時間。

消える半秒前にマネキンの右腕に当たった鏡剣は腕の関節を見事に叩き壊し、ナイフは腕だった木片と共に地面に転がり落ちた。

後を追うように、マネキンの本体もその場に崩れ落ちる。

僕は内心でガッツポーズをした。

自分の能力を使い、動くマネキンを倒したのだ。自分の能力が、彼の能力に勝ったという優越感から来る喜びだった。

それを見た上野の顔に大きな変化は無い。

「その程度は使えるのか」

上野は無機質に言う。

すると、次の瞬間、壇上にいたマネキンが一斉に動き出す。

「20体全員を相手にできるかな？」

不気味。

ただそう表現するしかなかった。

本来動き得ないものが動いている。人は自然的には起こりえない違和感を見たときに不気味だと感じるのだ。

そして、不気味は恐怖を含む。

ゆっくり。すこしずつ。じわじわと。人形達が、まるでゾンビのようにこちらに向かってくる。

動きは緩慢。が、全員が手にナイフを持っている。

使い慣れていないもの刃物は恐れるに足らない。そんなことをどこかの主人公が口にしていたが大きな間違いだ。

包丁というのはそれだけで必殺なのだ。命中率が低いが一撃の技を持っていく主人公と同じ。

竹刀の一本でもあれば状況が変わってくるが……生憎そのようなものは無い。というか準備するのを完全に忘れていた。

あー僕馬鹿。

でも仕方が無い。そんなものが必要になる状況が日常にはないのだから。

そう言えば。黒崎にパワーアップしてもらったんだった。

と、それを思い出すと今でも赤面してしまい、こんな状況で何を照れているんだと思うが、仕方がないだろう。

さつきは難なく3秒以上の具現化に成功したが、今考えてみれば黒崎のパワーアップのおかげだろう。

黒崎いわく完璧に術を使えば、鏡に魔力の続く限りの寿命を与えることができるらしい。ただ、今は慣れないためにすぐ消滅してしまうだけらしい。

なら、今度はありったけの力を込めて。

イメージするは、刃渡り60センチ、幅3、4センチの長剣。

そして僕は駆け出した。次の瞬間、握られた手には確かに鏡の剣。形は剣だが、表面は光り輝き全てを反射している。それはまさしく鏡剣。

そのまま鏡剣は確かな軌跡を描き、一番近くにいたマネキンの間接を横なぎに両断する。

「よししゃ……」

と、喜んだままでは良いが、次の瞬間には鏡剣が光となって四散してしまったのだ。強度が足りないということか。ならばまた作れば良いだけのこと。

すかさず次の剣を作ってマネキンを一閃する。いかに包丁を持つていようと、動きが緩慢な人形相手なら、リーチさえ確保すれば恐れるに足らない。そのまま一体、また一体とマネキンを壊していく。そして、6体目。もはや単純作業で剣を作り

「あ……」

空の手を振り回す。

何故……そう思った瞬間、マネキンのナイフが右肩を掠めていた。

「君崎君っ！」

水樹が叫んでいる。

切り裂かれた制服、走る痛み。掠めただけ、血がにじむ程度の傷だったが、それでも痛くないはずが無かった。

咄嗟の判断でマネキンに蹴込みを喰らわせる。するとマネキンは数メートルの地面にぶつかって動かなくなった。

しかし。本当に困った。

これで、武器を作ることとは不可能になったわけだ。

こうなったら、いつそ逃げて武器を持ってくるというのがベストなのだろうか……。

どうも、逃げるのは癪に障る。プライド許さない。逃げるんじゃない、戦略的撤退だと、言い聞かせてみるが、上手くいかない。

命がかかっている状況でこんなことを思うなんて、それが分かっていないのかもしれない。

「ただ。逃げられるわけが無かった。」

「……好きな子の前で逃げ出すなんて男としてできない。」

「あー大方魔力切れかな？　ちなみに、逃げようとしてるなら無駄だよ？　外にも人形はいるから」

上野の声が体育館に響く。

「何だ……逃げようとしても逃げられないのか。」

「それなら、ちょうど良い。」

「もう立ち向かうしかないのだから。」

よく考えてみれば。わざわざ人形の相手をする必要なんてどこにもない。大元を叩く。基本戦略だ。

魔術というのは、気合でなんとかなるモノなのかは知らないが、何とかして見せよう。

「トレース……オン」
違う。

「その幻想をぶち壊す！」
違う。

「トリプルアクセル！」

浅田真央はこんな風にいちいち技名を言ったりしない。
気を取り直して。

必殺技の発動は諦めて、僕は普通に走り出した。直線状に5体の人形がいる。

まずは一体目。気合を入れて鏡剣を作り 切り裂いた。

まだまだ。僕はその剣に消えるなど、命令する。

それを感じ取ったのか、剣は5秒経過しても消えることが無かった。

僕はさらにそのままもう2体を剣で一閃し、そのまま直進した。

手にはしつかりとした感触が残っている。もうマネキンなど相手ではかった。

僕は一気に残りのマネキンを切り伏せ、壇上に飛び乗る。

「水樹！」

来たなコレ。高感度アップ間違いなしだな。

水樹の不安げな顔を見ると、心の中とは言えふざけていたのがとてつもなく申し訳なく思える。

「君崎君……」

「己、君崎にこんな不安げな表情をさせるとは許せん！」……など

と声に出して言うのは余りにも痛いので、心の中にとどめておく。

「上野。何がしたいんだ」

聞くと、上野はかすかに笑みを浮べた。

「何がしたい？ 知るかそんなもん」

そう言うのと、上野の横にいた人形が動き始めた。

そいつは一体だけ、他とは違い包丁を持っていない。

代わりに持っているのは木刀。

本来であればマネキンに支えられるはずのないものだが、そこは魔力が補っているのか、マネキンはしっかりと直立している。

そして、マネキンが剣を振りかぶってくる。

その動きは今までのそれとは比べ物にならなかった。

速い。

僕はその斬撃を何とか鏡剣で受け止めるが、すかさず次の攻撃が来る。

速いだけではない。一発一発に重みが在る。とても木刀の重さではない。まるで、鉄の塊でも振り下ろされているような重さ。

3発。たったそれだけで鏡剣は砕け散ってしまった。

僕は咄嗟に後退する。

「ほら休んでる暇はないぞ！」

上野が手を振り上げ、炎弾を飛ばしてくる。それを辛うじて交わして、体勢を立て直す。

遠距離攻撃。

敵にはそんなものもあつた。一方、僕は飛ばすものといえば、靴が精一杯だ。あとと言、と言うものも在るけれど、この状況で、炎弾を超えるそれを言葉だけで作るのは難しい。

いや、試してみる価値は在るか。

「お前の母ちゃんデベそ！」

………と言おうとしたが、小学生レベルなのでやめておく。そういえば。

黒崎から聞いた話によれば、鏡の力の根本は『すべての現象を映

す』。漫画風に約してしまえば、敵の必殺技をコピーして跳ね返す、という解釈で良いのではないだろうか？

あれ、それって何か無敵じゃね？

出来るといふ確証が在るわけではないのに、急に自信が沸いてきた。

しかし、残念ながら方法が分からない。念じれば良いのか？

そんなことを考えていると、マネキンが動き出した。僕は咄嗟に鏡剣を作って敵の攻撃を受け止める。

今度は先ほどの教訓から、一撃の後、すぐに反撃した。

確かに、マネキンの動きは速いし重い。だが、いささか直線的過ぎる。

確実に、一撃でマネキンを破壊し、持っていた木刀を奪う。

鏡剣がすぐ消えてしまったところを見ると、やはり、魔力はほとんど残っていないらしい。そうになると、リーチの長い武器は重宝してくる。

ついでにマネキンのパーツを上野に投げつける。

が、ひょいっといとも簡単に避けられてしまった。

正直。どうしようもない。せめて盾になるものがあれば話は変わってくるが、生憎鏡の力ももう使えない。

万事休す。

そんな中、戦局を変えたのは水樹だった。

水樹が目で何かを訴えている。

それを読み取るうした瞬間、水樹の足が動いた。

彼女は両足で上野の足首を蹴ったのだ。教壇を支えにした蹴りはかなりの威力を持っていた上に、不意打ちということも合って、上野は簡単にバランスを崩し倒れたてしまった。

その瞬間、水樹の意図を察した僕はすかさず上野に走って上野の飛び掛り、そのまま手を押さえつけた。

暴れられては困るので、胸に一発突きを入れておく。

すると上野は咳き込み、抵抗は弱くなった。

念には念を入れて、もう一発胸に突きを入れる。

手加減はしたが、若干可愛そうな気もする。とりあえずしばらく抵抗はないだろうし、あっても水樹さえ助ければ逃げるだけで良いので、とりあえず水樹を開放することにする。

「大丈夫？」

声をかけると、いまだ不安げな顔で小さく頷いた。

両手は縄で縛られていた。それは自分では無理でも、他人であればすぐ解けるものだった。

「10秒ほどで縄を解く。」

「立てる？」

「うん」

ここで手など差し伸べたらカッコいいのだが、恥ずかしくてそれが出来ない。

「僕意外とヘタレだな……。」

立ち上がった水樹と再度目が合い、何だか気まづくなる。

「ええっと、まあ、なんだ、無事でよかった」

「君崎君……」

あー流れて抱きしめたりしちゃダメだろうか。いや、さすがにダメだよな……。

そんな風に葛藤していると、上野が立ち上がるのが見えた。

「上野君！ もう止めてよ！」

水樹はが上野に懇願する。上野はただこちらを睨みつけてきた。

「お前、一体何が目的なんだ」

そう聞くと彼は震える声で答える。

「目的？ んなの知らねえよ！ ただ、俺はあつた頃からずっと水樹さんのことが好きだったんだ！」

それを聞いて、なんとなく分かった気がする。

つまりコイツは、水樹に告白して振られ、そこに突然変な男（僕）が現れ、どうしようもなくなって、早まった行動に移ってしまった。別に明確な目的が在るわけではなく、ただ、突発的に僕に復讐しなくなっただけ。

そういうことなのだろう。

「なるほど」

なんか納得した。

ようは失恋したショックで冷静さを失った。それだけのことが。

「お前、水樹が好きなんだよね」

「そうだよ！ この一年間ずっと水樹さんのことだけ考えたんだ！」
一年間。長いな。

「そうか」

そう呼びかけると、上野が手を振り上げた。

炎弾を打つ気だ。

そう思う前に僕は飛び掛った。

撃たせる間もなく、みぞおちに突きを食らわせる。

今度は一切遠慮のない本気の突き。小学校六年間で鍛えた中段突きは、上野の意識をフライ・アウェイしてした。

「馬鹿やるー。好きだった期間なら俺のほうが長ーんだよ！ 俺は

中三の春から好きだったんだ！」

「……………などは、恥ずかしくて口が裂けても言えないので、心の中で叫んでおく。」

ついでに中三の頃からと言っても、その時は春期講習のときたま見て可愛いと思っただけで、実際その頃は恋してたわけじゃないけどな！

「誰に話してるんだ僕。」

「とりあえず上野は意識ないみたいだし、もう大丈夫だろう。っていうか、死んでないよな。」

「まあ、一応悪者だし、放っておいてもバチは当たらないだろう。」

「僕はとりあえず水樹のほうに振り返った。」

「傷、大丈夫？」

「水樹は心配そうな顔で聞いてくる。」

「そういえばさつき少し斬られたっけ。まあ、かすった程度だし、もう血も止まっている。」

「あ、うん。全然大丈夫」

「そう言う水樹は先ほどに比べれば安心して見えるように見える。」

「そっか。よかった」

「……………まあ、積もる話はあるけど……………とりあえず帰ろうか？」

「そう提案すると、彼女はようやく笑みを浮べて頷いた。」

夕焼けを背景に、小鳥のさえずりをBGMに……だったら良かったのだろうが、生憎天気は曇り、BGMはスピーカーから流れる選挙活動の演説だった。

マジでない。

白馬の王子様（僕だ）が深窓の令嬢（勿論水樹だ）を助けたところなワケで、本来なら良い雰囲気でフラグたちまくりな状況なのに、そんなときに選挙活動してる政治家が憎い。

それでも、まあ良い雰囲気であるのはとりあえず変わらなかった。

「君崎君……手品師だったんだね」

そう言うことにしておいた。

いや、いきなり魔術だとか言っても信じないだろ。それなら、手品師だと言うことにしておいたほうがよっぽど説明が楽だ。

「本当に……今日はありがとう。助けてくれて」

「うん」

突然、水樹が立ち止まる。

「水樹？」

「あのね……その……」

次回、告白来る！ 復活くりポーン！ 死ぬ気で告白！
違うか。

「私……君崎君のことが前から好きでした」
違くなかった。

「アレ、なんて言うんだっけ、こつこつこの、ご都合主義？」
「……………」

上目遣いに見つめてくる水樹の目線に、心臓バクバク。

ええっと、こつこつこの後の展開として考えられるものといえば、

夢才チ、妄想才チ。

ともかく。好きだった少女（しかも美少女）から告白される。それはとてつもなく夢のようなことで。

だからどうして良いか分からず、10秒余り考え込んで、ようやく自分のするべきことを認識する。

僕は今の気持ち正直に言うことにした。

「お前ガス機だー」

「変換ミスしてるから!」

「アナタのコトがスキダカラー」

「流スター風!？」

「眼鏡市場b」

「ファンが怒っちゃうから!」

水樹は真面目な話してるのに、僕最低だな……。

だから、僕は改めて言う。

「……僕も水樹七歌のことが好きでした。……ずっと前から好きでした」

僕の答えに、水樹は驚きの表情を見せた。

「……本当？」

「勿論。どれくらい信用できるかというと、ハターハターの連載再開告知くらい信用できる」

そんな僕の冗談に、彼女はもう何も言わない。

……痛い。

「……うう」

アレ。

水樹が泣き出してしまった。

緊張が解けて、涙腺も緩んでしまったのだろう。決して、告白した相手がこんな馬鹿だったとわかって後悔しているのではないはずだ。

「……泣くなよ」

「う……ん」

ここで、抱きしめたりできたら言いのだが……自分のヘタレ具合を呪う。

けれど、彼女の手を握るくらいは出来る。

同じくらいの体温なのに、どうして人の暖かく感じるのだろうか。水樹の手はただただ暖かくて、そして柔らかい。

ああ、これが俗に言うリア充ってやつか……。

選挙演説をBGMに、そんなことを思ったのだった。

後日談。と、見せかけてその日の夜のこと

後日談。と、見せかけてその日の夜のこと

正式に付き合うことが決まった日の夜。

早速、電話でデートをしようという話になった。

デートの日にちと場所が決まって、じゃあおやすみ、と言いかけたその時、

「その……君崎君ってどんな服が好き？」

そんなことを聞いてきた。

「服？」

もしかして、デートに着てくる服選びの参考にするのだろうか。

「ワンピースとかミニスカートとか」

「ん、まあ水樹に似合うのなら何で」

いや、待て。

「 そうだな。一つ」

「何？」

そうだ。あれしかないだろう。

「大盤振る舞い」

首をかしげる水樹。

意味を知ったら変態扱いされるだろうな。……でも、ちょっと見てみたいかも。そんなことを考えてから、僕はやっぱり何でもないと言い直したのだった。

(終わり)

info2 第一章あとがき

こんにちは。アロです。

いやー。mixiでは連載終了していた本作ですが、なるう、でも書き上げることが出来ました。

実は、この作品、ファンタジー要素を抜いて書き直そうと思っています。

と言うのも、ファンタジー要素無しでも成立するんですね、この話。

今はMF文庫J新人賞に出す作品に集中しているので、書き直しは何時になるか……。

それでも、いつかは絶対書きなおしたいです。

というのも、この作品は、自分の作風の方向性を見出した作品なんです。

どんなシリアスな噺にも、笑いを混ぜていこう。

けれど、シリアスなときはシリアスに。

それが私のコンセプトです。

次回作、銀盤×少女では、その辺を強化、さらに、魅力的なキャラを書くことも目標にしています。

その、原点がこの作品になるかなと。

さて、この作品を最後まで読んでいただいた皆様、本当にありが

とつごぞいました。

また、この作品の続きを書くことになると思いますが、その時も
よろしく願います。

ちなみに、mixi内で銀盤×少女連載中です。こちらはな
ろっ、よりも早く更新されます。

http://mixi.jp/show_profile.php?id=24261036

では、また近々合えることを期待しています。

2010/01/04日(月)アロ

サクライロノキセツを聞きながら

info3

現在、MF応募作に集中しているので、こちらの次の章の執筆を中断しています。

なので、とりあえず、完結扱いとさせていただきます。

MF投稿作が書き終わり次第、まだ書くので、しばらくお待ちいただければと思います。

では、これからもよろしく願いします。

現在執筆中。

<http://ncode.syosetu.com/n2715j/>

銀盤x少女 ~リンク駆ける少女~ - link step
girl -

サイト

http://book.geocities.jp/kimib
okucat/plus.html

plus

ミクシィ

http://mixi.jp/show_profile.
?id=24261036

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9681i/>

いつかトべるモノ

2010年10月8日14時37分発行